
月にまつわる短編集

あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月にまつわる短編集

【Nコード】

N9742A

【作者名】

あきら

【あらすじ】

「月」をテーマにした企画に参加する際に書いたボツになった作品たちです。

月まで三十八万キロ

月を見上げた。昼間に見える月は白くて、儚げで、それだけで僕は自分が違う世界に立っているような気さえした。

考えてもごらんよ。手を伸ばしても伸ばしても、届かない、遙か高み。あの場所に人類は立ったことがあるんだ。あの場所に行った人がいるんだよ。信じられるかい？ いや、そんな事は誰でも知っているし、今更そんな事言ってる奴なんていないよ、って君は言うかもしれないけど。でも、でも僕は信じられないんだよ。あの場所は、だって三十八万キロも彼方にあるんだぜ。三十八万キロ。ちなみに言うておくけど、地球の直径は約一万三千キロ。地球を一周するには、直径×円周率だから、えーっと……。だいたい四万キロ。分かるかい？ 地球を九周半もしないと月には行けないんだよ。君は海外旅行したことあるかな？ 僕はね、一度ブラジルに行ったことがあるんだよ。そう、日本から見て地球の裏側にあるんだよ。もう行くだけで大変だったね。まるまる二十四時間かかるんだよ。まあ口ス経由だったから、余計にかかってるんだけどね。でも一日の大半、飛行機の中で座ってるわけだよ。そりゃもうお尻に感覚なくなっちゃってさ。ってそれはどうでもいいけど。地球を半周するんだってこのザマだよ。それを九周半なんて気が遠くなる話じゃないか。

ああ、なんだか話がずれちゃったね。とにかく僕が言いたい事ってのはさ、人間はがんばれば、あの月にだって行けるんだ。僕だって、いつかはあの月に立てるかもしれない。人には信じられないような可能性が眠っているって事。二十歳にもなつてそんな夢みたいな事語ったら、君は笑うかい？ でも僕はね、本気でそう思うんだ。あ、ホントに笑った。いや、おかしいかい？ うん、僕も自分でおかしいよ。笑っちゃうよね。でも、それでも、そう思っていないと、

実際僕はここに立っていることさえできない。まあ、それは君には今のところ関係ない事なんだけど……。

その、まあ、君もあの月を見てごらんよ。綺麗だよ。残念ながらまん丸くはないけど、なんか色々悩んでるのも、本当につまらないなあって思えてこない？ 昼間に見える月ってさ、なんか不思議な感じがする。

そうそう、地球から見える月の大きさとちようど太陽と同じ大きさなんだって。しかも、同じ軌道上に見えるんだ。日食とかそれでおこる訳なんだけど、それってすごい偶然だと思わない？ 色んな物理的力で同じ軌道になるってのは、なんとなく分かる気がするけど、同じ大きさに見えるって、それは地球からの距離とか、月や太陽の大きさとか、色んな偶然が重なって、そうなっているんだよ。あたかも、そうである事が当然のようにね。たまたま月があの大きさで、たまたま太陽があの大きさで、たまたま月まで三十八万キロで、たまたま太陽まで一億五千万キロで……。それらが一つでも違っていたら同じ大きさには見えなかったんだ。僕らは日食は月が太陽に重なって出来るって教え込まれて、何の疑問もなくそれを受け入れている。でもね、それは本当に目に見える奇跡なんだよ。ちなみに地球から太陽までの距離を一天文単位と言ってね、ってそれはどうでもいいね。

いやいや、ちょっと熱く語りすぎたかな……。うーん、なんかね、君とはこうやって一緒に月を見ながら話がしたいって、ずっと思ってたんだ。だから今日、君を呼び出したわけなんだけど、退屈かい？ そうだね。退屈かもしれないよね。延々とこんな訳の分からない話を聞かされるなんて……。でもね、一応僕の中で順序って物があってね。もうちょっと、無駄話に付き合ってくれるかな？

世の中には、月に行けるような可能性と、色んな偶然があるって思ったら、それこそ何でもできそうな気がするんだ。僕もね、昨日まではそんな事ちっとも考えてなかったんだけど、でもそう考えたら、いても立ってもいられなくなっただ。君はそんな事ある？

自分が今ここに立ち止まっている事がもったいないぐらい、何かをしなくちゃ、したいんだって衝動にかられる事が……。ないかな？ え？ 今すぐ、ここから立ち去りたい衝動だって？ ちよつと、待つて。それはないよ。いや、本当に……。冗談？ いやあ、君も人が悪いなあ。いや、そんな笑顔でごまかそうとしたって、そうはいかないよ。

話を戻すよ。月と聞いてどんな事を思い浮かべる？ 兎の餅つきだって？ あ、国によっては蟹に見えるんだって。ちなみに僕は蟹座なんだけど、蟹って美味しいよね。いや、そんな事はどうでもいいんだ。僕はね、時々思うんだ。月は地球に寄り添う恋人だって……。あ、いやそんなアカラサマに、うえ、って顔しなくても……。僕だって自分で言ってて恥ずかしいんだよ。いや、ほんとに。普段はそんなキザな事は言わないんだけどね。君も知ってるだろ？ でもね、こう言うのには理由がちゃんとあるんだよ。神話に出てくる月の女神はね、必ず恋におちているんだ。色んな国に色んな神話があるんだけどね。そのほとんどが、月を司るのは女神で、恋をする月はね、恋の星なんだよ。え？ 神話に出てくる神のほとんどが恋をしてるって？ いやあ、君は鋭いな。いや、それ以上に実に詳しくそうじゃないか。僕の話についてこれるなんて、そりゃあ珍しい。いや、だからこそ、君とこうして一緒に月を見たかったんだけどね。さてと、そろそろ本題に移ろうか。

人間には色んな可能性があって、世界にはたくさんの偶然があつて、そして月には恋する女神がいる。何の話だって君は思ってるだろうけど、つまり、こういう事なんだよ。

今こうやって一緒に月を見ているのだって、たくさんの偶然が重なり合っていて……。その先の可能性は無限大に近く枝分かれしてるんだ。月に行くことだって、その可能性はゼロじゃないし、そして君と僕が付き合う可能性だってゼロではない……。だよな？

だから、その、僕は君のことが好きなんだ！ これからも一緒に月を見たいし、他にも色々……。えっと、とにかく！

僕はあの月に、恋の星に誓うよ、君を幸せにするって……。

え……常に形を変える気まぐれの象徴に誓っても駄目だって？
こりゃ一本とられたな。

月まで三十八万キロ（後書き）

ボツ理由。

締め切り直前になって、

オチの部分がかの有名な「ロミオとジュリエット」で出てくるセリフにある。

という作者にとってはショッキングな事実が判明。

自分で考えついたつもりが、

実は過去にどこかで見聞きした物の

パクリだったという事が分かったときの脱力感。

いい勉強になった作品でした。

満月と頭痛と炎の灯る世界

月は嫌いだ。満月の晩は頭痛がひどい。低気圧の日に頭痛がするって話はよく聞くけど、俺のように月の満ち欠けで頭痛がおこるって話は聞いたことがない。理由は分からないけど、潮の満ち引きと同じように、人体にも影響を与える事があってもおかしくない。とにかく頭が痛い。イタイ、イタイ、いたい、いたい。

会社帰りの道すがら、あまりの頭痛に朦朧としながら、あのニクツタラシイ満月を睨む。ぼやけて見えたその満月は気候のせいかなや赤く見える。

赤い月は凶荒の前触れとか、不幸の象徴のように扱われるが、光の屈折によるものだと言った事がある。地平線近くに見える時など、赤く見えるらしい。今日は高い位置に見えるけど……。

そんな事よりも、頭が痛い。脳味噌全体がズキズキと痛む。こめかみを抑えると痛みが和らぐとか、そういうレベルの痛みではない。今日のは特にひどい。これまでの痛みとは比べようのない痛みが、俺の思考能力を奪っていく。

会社帰りいつも通るこの路。静かな住宅街の中で、時折聞こえてくる笑い声。日常が詰め込まれた、いつもの風景。それがなんだが現実の物ではないような、夢の中で歩いているようなこの感覚。浮遊感と嘔吐感。たまらず、道路の脇でしゃがみ込む。聞こえていた日常の音が、どんどん遠くなっていく。視界がぼやける。赤い満月が大きく見えた。意識が……。

けたたましい音に目が覚める。太鼓の音？ 俺は上体を起こしてゆっくりと周りを見渡す。広場のような場所の中心で炎が燃えている。その周りを男達が上半身裸で踊りながら回っている。そのさらに周囲を女達がそれぞれ太鼓や笛などで、騒々しい音をかき鳴らしている。何かの祭りか？ まだ痛む頭で必死で状況を把握しようと

した。さっきまでの日常と、この非日常の風景。ふと自分に目をやると、自分も上半身裸で、下には履いたこともない派手な紫色のズボンのような物を履いていた。素材は綿のようだったが、その形はなんと言ったらいいのだろう。膝の少し上までスカートのようになっているが、そこからはズボンのようにそれぞれの足に別れている。内股のあたりがスースーして気持ち悪い。どうやらその下には何も履いていないようだった。自分の股間に直接風があたるのを感じていた。つまり、しゃがんだりしたら、丸見えな訳である。いつこんな格好にされたのか……。考えると、急に恥ずかしくなった。ともかく、俺はその広場の隅っこの方に横たわっていた。広場の外の方を見ると、鬱蒼とした林に囲まれていて、その向こう側は暗くて見えなかった。空を見上げると、あの赤い満月が炎の灯りに負けることなく輝いていた。

とりあえず、立ち上がる。大丈夫、フラフラするものの、ちゃんと一人で歩ける。頭痛も少しましになったようだ。少し離れた場所に座っている老人に目が止まる。背中はありませんぐらい丸まっていて、片膝を立てて座っていた。手元にある石をぶつけ合って何かをぶつぶつ言っているようであった。何してるんだろう？ この状況を説明して欲しくて近づいてみた。

「あの、すいません」

老人はこちらに一度目をやると、再び石遊びを始めた。無視されてると思い、もう一度強めに問いかけた。

「あの……」

「ようやくお目覚めかの」

「え、あ、はい。えっと、ここは？」

「そうじゃのう。なんと言えは納得してもらえるか……」

老人はそう言っただけの方を眺める。俺もつられて、そっちを見る。相変わらず、男も女も浮かれ騒いでいた。

「まあ、平たく言えば死後の世界かの」

老人の言葉に俺の思考は止まる。

「え？ 何です？ 死後の世界？」

死後の世界。その言葉から連想するもの。三途の川、花畑、地獄、天国……。それらの言葉を感じる物はここにはなかった。しいて言えば、楽しそうに馬鹿騒ぎしてるから天国？

俺はそんな馬鹿な事を考えてる自分がおかしくて、頭を振った。頭がずくと痛む。

「信じるも、信じないのもアンタの自由じゃが、ここはあんたが創ったあんたの死後の世界。こういった世界がいくつも存在していて、それを纏めて人は死後の世界と言うのかの」

「あ、あなたは、いや、彼らを含めて」俺は炎の周りで踊り狂う人たちを指さして「何者なんです？」

老人の言葉は納得できるものではなかったが、この非日常の状況が普通ではない事は納得できた。

「ワシはこういった世界を回って管理調整する役目を持っている。いや楽しいぞ、この仕事も。人それぞれに創られる世界というのは、実に個性的で創造性に満ちていて」

「あの、じゃあ、どうしてあの月は、あの月は満月なんですか！俺が創った世界ならどうしてあれがあるんですか！」

言葉が荒い。こんなふざけた冗談につい本気になってしまった。

「昔から言っじやる？ 月は死後の世界への扉。開いては閉じ、閉じては開いて、絶えず魂の行き来をしている」

「じゃあ、彼らは？」

「お主が創った、この世界の住人達。これから未来永劫、彼らと共に過ごす。仲良くせにやならんなあ」

俺は炎の周りを踊る人影を見て、背筋が凍るような感覚にとらわれた。

「あんたの冗談に付き合ってなんていられない。帰るんだ。俺は帰る」

広場を出て林へ飛び込む。

どれだけ走っただろう？ 時間の感覚がない。死後の世界だから？ そんな馬鹿な。林の中はじめつと暑かった。木々のざわめきは現実そのものだった。これが死後の世界の訳があるか。汗ばんだ手をぎゅつと握る。爪が掌に食い込み、痛みを感じる。大丈夫、大丈夫だ。現実だ。額に浮いた汗を拭い、俺はいったん立ち止まる。木々の間から見える空に月が見えた。

ちくしょう。月なんて嫌いだ。

俺はまた走り始める。

そういえば、よくこんな夢見たな。先が見えない林の中をひたすら走る夢。決まって同じ所をぐるぐる回って、同じ場所に出るって夢。

そう思った瞬間、俺はまたあの広場に出ていた。

「どうじゃ？ 納得できたか？」

あの老人が俺に話しかけてくる。俺は絶望という言葉を初めて実感した。膝の力が抜け、カクンと、その場に座り込んだ。

「お願いだ、俺を戻してくれ。まだやりたい事が、やり残した事があるんだ。結婚だってまだしてない。せつかく貯めた金だって、使わずに死んだらやりきれない。何のために俺は我慢して生きてきたんだ？ 毎日、毎日、くだらない事に付き合って、毎日、毎日だ。このままだったら、俺の人生ってなんだったんだ？ なあ、戻してくれよ、頼むよお」

俺は、泣き出していた。こんなに泣いたのは初めてだった。

「月が決める事じゃ。おまいさんの人生を月が終わらせてもいいと思っただから、おまいさんはここに来た。もう一度、月を見てみい。戻れるかもしれんな、なんせ月は気まぐれ屋さんだからのう」

涙で滲んだ目のまま月を見上げる。赤い満月。

赤い満月が見える。背中には堅いアスファルトの感触。遠くから車が走る音と、かすかに聞こえてくる人の声。よろよろと立ち上がると、いつもの風景が見えた。倒れているのを誰にも見つかったな

いということは、意識を失ってからそれほど時間が過ぎていないの
だろう。

夢？ だったのか？

まだ痛む頭を抑えて、よろよると立ち上がる。目尻を触ると、泣
いていた跡が残っている。掌には爪の跡。

どっちでもいいか。

俺は月を見上げて、そしてまた歩き出す。

やっぱり月は嫌いだ。

満月と頭痛と炎の灯る世界（後書き）

ボツ理由。

単なるオナニー作品になってしまいました。

異世界物を書いたことがなかったので

挑戦のつもりで書いたんですが、

いまいち書ききれなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9742a/>

月にまつわる短編集

2010年10月8日15時37分発行